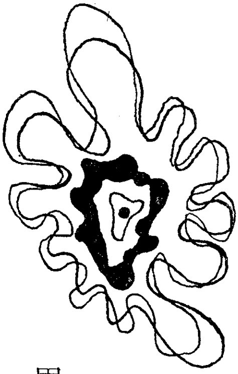
男性保育者に望むもの



黒田実郎
（聖和大学）

百年の歴史を誇る聖和女子大学が、一昨年創立二世紀を迎えるにあたって男女共学に踏み切った。昨年度はまず皮切りとして大学院修士課程幼児教育学専攻コースのみを男性に開放したが、三六歳の会社員を含めて五名の男子受験生があり、そのうちの二名が合格した。今年度からは、学部の幼児教育学科にも男子を受け入れることになったが、男子受験生の数は、われわれの予想を上まわり五五名もあった。結局、一三名が合格し、そのうちの八名が入学したが、競争率は実に四倍強で、文字通り〝男の中の男〟が選ばれたわけである。

私は聖和に勤めて約三〇年になるが、その間、関西学院大学、神戸大学、大阪大学など男子学生の多い大学で長らく非常勤講師をしてきたので、共学といっても別段初めての経験ではない。しかし、聖和のように百年の伝統のある「女の園」に男子学生を受け入れるとあっては、多少のとまどいがあったというのがいつわらざる告白である。

大学院での共学はすでに一年が経過し、男子学生もいよいよ修士論文作成の段階になっている。過去における私の経験からいうと、女子学生は一般的に大変な勉強家で、綿密にデータを収集して、よくまとまった論文を書く。ところが独創性や創造性という点になるとやや物足りなさを感じさせられるのである。これは何も大学生にかぎったことではない。子どもの自由遊びや造形活動においても、女児は一般的に型破りの行動が少なく常識的であるが、そのために個性的でないともいえる。ところが、男児はかなり粗野であり、標準からの逸脱もいちじるしいが、反面において個性的で興味深い面も認められる。

私がかつて師事した米国ブラウン大学のシュロスバーグ教授は、男女に見られるこのような差異のおもな原因として、子どもに対する親の養育態度を重視し、それを "lesson and problem" という術語で説明した。つまり、親が女児に対する場合は手本を示して懇切に伝授 (lesson) する傾向があるので模倣を生じやすいが、男児に対する場合は手本を示さず単にヒント (problem) を与えるに過ぎないので独創性を育てやすい、という説明である。

一九六〇年代頃までのアメリカ心理学界では学習理論が支配的であったので、シュロスバーグ教授の「レッスン・アンド・プロブレム」仮説は当時非常に注目された。ところが最近になって、男女における行動特性の差異は、生後の学習よりも生得的要因によって左右される面が大きいという説が台頭した。たとえば、ガレイとシャインフェルドは、活動性における男女の性差は生後二三時間では明らかでないが、七一時間までの間に顕著になるといい、またモスは、女児に比べて男児は生後間もなくから睡眠時間が少なく、泣き叫びや体の動きが激しいという事実を指摘し、男児は動的で女児は静的という一般的特性が親の養育態度よりも、むしろ生来的要因によるところが大きいのではないかとのべた。このほか、多くの研究者によって、触覚、聴覚、視覚における敏感度や、知能の諸因子における性差は、学習的要因よりも生物的要因によって影響される割合が大きいという説が提唱されている。これらの生来的傾向に加えて、親たちが男女児のそれぞれに対して異なった態度で接するということが、おそらく性差をさらに助長するのであろう。

ところで男子学生の研究活動に戻るが、私が彼らに期待するのは、従来の女子学生とは異なった観点から子どもたちの行動を観察し、それを分析して、新しい幼児教育観を生み出してほしいという点にある。彼らのある者は男性保育者として、将来、現場で活躍する者もあろうが、もしも彼らが女性保育者と同様な態度で子どもに接するのでは、女性の職場にあえて男性が進出するということの意味がない。女性では得られない何ものかが付加されることによってこそ男性進出の意義が認められるのである。ピアジェの発達理論が、女性心理学者インヘルダーの実証的裏づけによって大きく発展したように、男女の幼児教育研究者がそれぞれの特色を生かして協力し、幼児教育がさらに発展することを望んでいる。